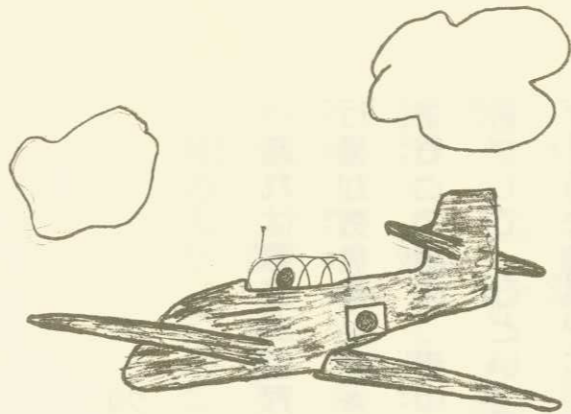


これは名古屋の基地から飛んできた陸軍の飛行機で、燃料が漏れて落ちたらしい。飛行士は
椿坂の山田航空少尉と同年兵だった。

日本軍の秘密が漏れないよう、飛行機の主な残骸はトラックで持って行ってしまった。操縦席
の風防ガラスの破片は、服にこすりつけると甘いような不思議なおいがしたので、子供たちは
大事に持ち帰り宝物にした。

戦時中は、河和田にも飛行機が飛んできた。航空隊に入ると練習機で訓練を受ける。それが終
つていざ実戦という前に、故郷への挨拶の飛行が許されていた。河和田
小学校の上を、低空飛行で旋回しながら別れていった飛行機もあった。
プロペラの圧力で国旗掲揚塔がゆれ、飛行士の顔が見えた。
後で聞いた話だが、山田航空少尉はB29爆撃機と戦って、勝ったこ
ともあったとか。

あれからもう六十年が過ぎてしまった。



30 清平さんと黒仏さま

元龜三年（一五七二年）二月中旬のこと、金谷の百姓清平さんは続けて三晩も、庭の池から光
が輝く夢を見ました。信心深い清平さんは、お仏壇に香と花をそなえて、一心に念仏を唱えてい
ました。

すると、庭の池の方で、

「清平、清平。」と呼ぶ声がします。急いで庭の戸をあけると、池には五色の雲がたなびい
ていて、まるで水がわくように光が輝きわたっています。すると水の中から神々しい仏さまが現
れて、清平さんの肩に乗られたのです。

清平さんは喜びのあまり、家の中におつれして昼も夜も供養しましたが、このような尊い仏さ
まをこんな百姓家に置いてはもったいないと、近くのお寺にお移しました。すると清平さんは
ある夜また夢を見ました。仏さまが、

「いっから東南の方に禅寺がある。そこに移りたい。」

と、おっしゃるのです。

清平さんは、仏さまを背負うと、急いで尾花の長禅寺に向かいました。一方長禅寺の竹庵和尚も同じ夢を見て、金谷へ尋ねて来られるところで、二人は途中でばったり出会ったのでした。こうして仏さまが長禅寺に移られると、お参りの人々で大変にぎわいました。

時はうつり、今は、涅槃会に一日だけお厨子の扉が開かれて、お釈迦さまの尊い像が拝めるのです。黒漆塗りの伏目がちにやさしく微笑んでおられるお姿に、人々は親しみをこめて、黒仏さまと呼んでいます。

さて、涅槃会の最後には、赤、黄、緑というどり美しいお釈迦団子がまかれます。お団子は、尾花の子供たちが鈴を持って、

「脇之谷、長禅寺、涅槃の勧め。」



と、唱えながら托鉢した米で作られるのですが、托鉢は必ず清平さんでお経をよんでからはじめる習わしでした。このお釈迦団子を身につけていると、蛇にかまれないといわれて、子どもたちは綺麗な布袋にいれて、腰にさげていたものです。

31 金部連

もう五・六百年も昔のことで、詳しいことはとんとわかりませんが、金谷に金部連という人が住んでいました。連といいますが、きっと古くからの豪族だったのでしょう。



この人は、とてもすぐれた人物で、村人からは「越士の流」と云われておりました。盛んなものも必ず滅びるといふ諺どおり、朝倉氏が一乗谷に城を築いたところに滅んでしまったということなのです。